

## 研究課題 ADHD 衝動型幼児の交通事故を防止するための教育方法の開発

代表研究者	筑波大学医学医療系	准教授	水野 智美
共同研究者	筑波大学医学医療系	教授	徳田 克己
	富山大学人間発達科学部	准教授	西館 有沙
	東京未来大学こども心理学部	助教	西村 美穂
	目白大学保健医療学部	専任講師	安心院朗子

## 【まとめ】

ADHD 衝動型の幼児は大人が手をつないでいても、振りほどいて飛び出してしまい、事故防止に有効とは言えないことが明らかになった。また、事前に飛び出さないように指導したり、飛び出した後に注意を促しても効果はなかった。一方で、絵カードなどの視覚的な情報を提示する、興味をそそられるものが目に入らないように子どもを歩かせる、子どもが手を振りほどきにくい手のつなぎ方をする、散歩ヒモを使用する、衝動性を抑える薬を服用することの有効性が示された。

## 1. 研究の所在と目的

筆者らは日常的に幼稚園、保育所に巡回し、発達障害児の保育方法について保育者の相談を聞き、助言をする活動をしている。その中で、散歩中における ADHD（注意欠陥多動性障害）衝動型の子どもの交通事故やけがに関する相談が大きな比重を占める。本研究では、ADHD 衝動型の子どもの交通事故を減らすための基礎的資料を得ることを目的として、①衝動傾向の強い幼児を担当する保育者を対象にした質問紙調査、②衝動傾向の強い幼児を担当する保育者を対象にしたヒアリング調査、③衝動傾向の強い子どもを持つ保護者を対象にしたヒアリング調査を行い、どのような対応が有効であるのか、反対に有効でないのかを明らかにしたい。

## 2. 保育者に対する質問紙調査

## 2-1 目的

衝動傾向の強い幼児は、散歩の際にどのような行動をとり、保育者はどう対応している

のか、また衝動傾向の強い子どもにどのような対応が有効であるのか、あるいは有効でないのかを明らかにする。

## 2-2 方法

## 2-2-1 調査対象者

保育者を対象とした研修会（5 か所；東京都、埼玉県（2 か所）、千葉県、茨城県）に参加した 1150 名を調査対象とし、743 名から回答を得た（回収率 65%）。そのうち、回答に不備のあるものを除き、711 名を分析対象とした。

711 名の内訳は、幼稚園教諭 650 名（91%）、保育所保育士 27 名（4%）、こども園保育者 10 名（1%）、無回答 24 名（4%）であった。保育歴は、5 年未満が 275 名（39%）、5 年以上 10 年未満 160 名（23%）、11 年以上 231 名（32%）、無回答 45 名（6%）であった。

## 2-2-2 調査方法

筆者らが講師を担当する保育者を対象とした研修会に参加した保育者に対して、自記式の無記名による質問紙と切手付きの封筒を配布した。回答後は、封筒に入れて郵送してもらった。調査時期は、2015 年 7 月から 2015 年 9 月であった。

## 2-2-3 倫理的配慮

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理審査の承認を得て実施した（承認番号 1015）。

## 2-3 結果

## (1) 衝動傾向の強い幼児の事故の現状

散歩の際に列から急に走り出してしまう子どもを担当した経験の有無を尋ねたところ、62%（324 名）があると答えた。担当した経験がある者を対象に、子どもの状態を尋ねた結果（表 1）、9 割以上が「興味がある物が目に入ると、そちらに行ってしまう」と答えて

おり、半数以上が「つないだ手を振り切って行ってしまおう」と答えていた。「急に車道に飛び出してしまおう」「赤信号を待ってられない」と答えた者はそれほど多くないが、一つ間違えれば大事故につながる可能性がある。また、「興味がある物が目に入ると、そちらに行ってしまう」「つないだ手を振り切って行ってしまおう」についても、反対側の歩道に子どもの興味がある物があれば、車の往來を確認せずに、大人の手を振りほどいて車道に飛び出す可能性が考えられ、交通事故の危険性の高さが示唆された。

散歩の際に自転車や車に接触しそうになったことを「非常によくある」「時々ある」「あまりない」「まったくない」から選択してもらったところ、「非常によくある」「時々ある」と答えた者は併せて 12% (37 名) であり、保育活動の中でも 1 割以上がヒヤリハットの経験をしていることがわかった。

## (2) 衝動傾向の強い幼児に対する指導の方法と効果

表 2 に列から走り出してしまう子どもに行った対応 (選択式) とそれによる効果を尋ねた結果を示した。なお、効果は「非常に効果あり (5 点)」から「全く効果なし (1 点)」までの 5 件法で尋ね、その平均値を示した。表より、「保育者がしっかりと手を握る」(82%) と答えた者が最も多く、「散歩の前に飛び出さないように言い聞かせる」(61%)、「子どもの前後左右に落ち着いて歩く子どもを配置する」(58%)、「列から飛び出した後に危険を伝える」(56%) が次いだ。このことから衝動傾向の強い幼児には、手をしっかりと握り、事前に飛び出さないように言い聞かせたり、子どもが興奮しないように前後左右に落ち着いて行動する子どもを配置するという環境を整えたりするなど、交通事故を未然に防ぐために事前の対策をしていることがわかる。しかし、その効果を見ると、「保育者がしっかりと手を握る」( $M=4.16, SD=0.81$ )、「子どもの前後左右に落ち着いて歩く子どもを配置する」( $M=3.8, SD=0.71$ ) については、効果があると感じていたが、「散歩の前に飛び出さないように言い聞かせる」( $M=2.91, SD=0.94$ )、「列から飛び出した後に危険を伝

える」( $M=2.95, SD=0.90$ ) については、効果は感じられていなかった。一般的に幼児に対する指導では、行動をする前にどのようにすればよいのか、何に気を付けなくてはならないのかについて、事前に説明する。その後、行動をしたのちに、保育者の指示に従わなかった子どもには、なぜ指示に従わないといけないのかを理由を示して説明する必要があると言われている (白井, 2013; 植松 2012 など)。そのため、交通安全指導においても、事前に飛び出さないように指導し、飛び出してしまった場合には、どのような危険が伴うのかについて指導していたと思われる。しかし、衝動傾向の強い子どもに、定型発達の子どもの有効な方法と言われる事前の指導を行っても、「興味のある物が目の前にあれば、事前の指導内容は忘れてしまう」(司馬, 2009)。そのため、いくら指導しても、効果がないということになる。また、約束を破ってから、そのことを叱ったところで、衝動傾向の強い子どもには、有効ではない (岩坂, 2014)。つまり、列から飛び出してしまう前から、この子どもたちに事故の恐ろしさを注意したところで、興味のある物が視界に入れば、無意味になってしまうのである。

今回の調査では、「子どもに散歩ヒモをつける」を選択した者は非常に少なかったが、高い効果 ( $M=4.33, SD=1.20$ ) が認められた。

## 3. ADHD 衝動型幼児を担当する保育者に対するヒアリング調査

### 3-1 目的

ADHD 衝動型幼児が散歩の際にどのような交通事故やけがを起こしたり起こしそうになったのか、また保育者は子どもの事故やけがを未然に防ぐためにどのような対策をしているのかを明らかにする。

### 3-2 方法

#### 3-2-1 調査対象者

ADHD 衝動型の幼児を担当する保育者 65 名を調査対象とした。なお、すべての子どもが ADHD の診断を受けているわけではなく、子どもの衝動性の強さに保育者が対応に困っているケースを含めた。

#### 3-2-2 調査方法

発達障害児が通園している障害児施設、筆者らが巡回指導をしている幼稚園、保育所で ADHD 衝動型の幼児を担当する保育者に対して、個別の半構造化面接によるヒアリング調査を行った。ヒアリング調査は一人につき 40 分～1 時間程度であった。

### 3-2-3 倫理的配慮

ヒアリング調査のデータはすべて電子データとし、個人が特定できないようにした。本研究は筑波大学医学医療系医の倫理審査の承認を得て実施した（承認番号 1015）。

### 3-3 結果

散歩中に子どもが車に接触したと答えた者は 2 名（3%）のみであったが、全員が子どもが保育者の手を振りほどいて走り出したり、車道に飛び出したことがあると答えた。

すべての保育者が子どもの手を強く握って放さないようにしたと述べた。また、車道側に保育者が立つようにして並び、子どもが車道に注意が向かないようにした（15%；10 名）、列の後ろの方に並ばせ、信号待ちの際に車道との距離を空け、すぐに車道に飛び出ないようにした（12%；8 名）、子どもの手が振りほどけにくいように手を握った（子どもの手首を親指と小指ではさみ、残りの 3 本の指で子どもの指を握る）（5%；3 名）、万が一のために散歩ヒモを子どもにつけるようにした（5%；3 名）などの対応をしていた。

さらに、散歩の前に保育者と子どもが手をつないで歩いている絵カードを見せるとともに、散歩中に何度も見せて確認しながら歩き、少しの時間でもできていたらほめていく対応をした（12%；8 名）、信号待ちの際に足形のマークを描いたシートを置き、その上に立たせるようにした（6%；4 名）などの視覚的に子どもに飛び出さないように促している者がいた。これらの対応をすることによって、少しずつ事故やけが、ヒヤリハット経験が減ってきたと保育者は述べていた。

## 4. ADHD 衝動型幼児を持つ保護者に対するヒアリング調査

### 4-1 目的

ADHD 衝動型幼児がどのような交通事故を起こしたり起こしそうになったのか、また

保護者は子どもの交通事故を未然に防ぐためにどんな対策をしているのかを明らかにする。

### 4-2 方法

#### 4-2-1 調査対象者

ADHD 衝動型の子ども（4 歳～8 歳）を持つ保護者 50 名を調査対象とした。なお、すべての子どもが ADHD の診断を受けているわけではなく、子どもの衝動性の強さに保護者が対応に困っているケースを含めた。

#### 4-2-2 調査方法

発達障害児が通園している障害児施設、発達障害児の親の会に協力いただき、ADHD 衝動型の子どもを持つ保護者を紹介してもらった。また、筆者らが巡回指導をしている幼稚園、保育所に通う ADHD 衝動型の幼児の保護者に協力を求めた。さらに、「子育てしにくい子どもをどのように育てたらよいか」というテーマで座談会を開催し、その中に参加していた衝動性の強い子どもを育てている保護者に後日、話を聞いた。それぞれの保護者に対して個別の半構造化面接によるヒアリング調査を行った。ヒアリング調査は一人につき 40 分～1 時間程度であった。

### 3-2-3 倫理的配慮

ヒアリング調査のデータはすべて電子データとし、個人が特定できないようにした。本研究は筑波大学医学医療系医の倫理審査の承認を得て実施した（承認番号 1015）。

### 4-3 結果

実際に交通事故に遭ったケースは 16%（8 名）であったが、子どもが急に車道に飛び出す、ちょっと目を離したすきに子どもがいなくなる、駐車場では片時も目を離せないことを全員の保護者が悩みとして抱えていた。子どもが急に車道に飛び出し、運よく接触は避けられたがドライバーからひどく叱られた、子どもが急に走り出して自転車と接触し、自転車を運転していた人を転倒させ、けがを負わせてしまった経験を持つ者がいた。

また、手をつないでいても手を振り切って走り出してしまうと答えた者が 60%（30 名）いた。全員が意識して子どもと手をつなぐようにしているが、手をつなぐだけでは効果がないことを全員が実感していた。万が一に備えて、散歩ヒモを使用している者は 24%（12

名)であった。使用している者の中には、「いくら子どもに言い聞かせたり、叱ったりしても効果がないため、子どもの命を守るためには散歩ヒモは絶対に必要である」と述べるなど、散歩ヒモがなければ子どもの命を守るために必要不可欠であると考えていた。ただし、ほとんどが周囲から反対意見を言われたり、批判的に見られたりしており、罪悪感を持ちながら使用していた。また、市販されている散歩ヒモの対象年齢が4, 5歳までであり、散歩ヒモが使えない年齢となり、衝動性がさらに強くなった場合に、子どもをどのように押さえればよいのかに悩む保護者もいた。

絵カード(スマートフォンの写真を含む)で、子どもと保護者が手をつないで歩いている姿を子どもに見せて、手をつないで歩くように子どもに促していた者は16%(8名)であり、その全員が効果を実感していた。

また、子どもが興味をそそられそうな物が先にあることがわかれば、大人が子どもの横や前に立ち、子どもの目に入らないようにして歩くようにしている者、駐車場で車を降りてから保護者が子どもをギュッと抱き寄せて落ち着かせた後に歩くようにする者もいた。

就学後の子どもを持つ保護者の中には、衝動性を抑えるための薬を服用したことによって、飛び出しが減ったと感じている者がいた。その保護者は、服薬していない日は明らかに子どもが飛び出す回数が多いと感じていた。

## 5. 今後の課題

保護者や保育者が有効であると感じていた方法(絵カードなどの視覚的な情報を使用する、振りほどきにくい手のつなぎ方をする、子どもが興味を持ちそうな物が子どもの目に入らないように立たせるなど)を保育者や保護者に伝え、それがどの程度の効果があるのかを測定し、交通事故を防止するためのマニュアルを作成していきたい。

また、子どもが大人と一緒に歩いていればドライバーは子どもが車道に飛び出してくると予測することが少ない(徳田, 2015)ため、一般のドライバーに対して大人と一緒に歩いている子どもがいた際にも減速や間隔を空けるなどの配慮を促していく必要がある。

さらに、散歩ヒモの有効性を保育者も保護者も実感しながら、世間の批判を恐れて、使用をためらう傾向があった。子どもの命を守るために、世間の認識の変容を促していく必要がある。

## 6. 研究成果の公表方法

国内の学術雑誌への投稿を予定している。

表1. 急に飛び出す子どもの行動

興味がある物が目に入ると、 そちらに行ってしまう	92%	(297名)
いつも落ち着きがなく動いている	57%	(185名)
つないだ手を振り切って 行ってしまう	55%	(179名)
保育者がいくら注意しても、 繰り返し走りだす	35%	(113名)
急に車道に飛び出してしまう	15%	(50名)
赤信号を待ってられない	5%	(17名)

(%の母数は散歩の際に列から急に走り出してしまう子どもを担当した経験のある324名)

表2. 列から走り出す子どもへの対応と効果

	実施率 (人数)	効果* (SD)
保育者がしっかりと手を握る	82% (266名)	4.16 (0.81)
散歩の前に飛び出さないように言い聞かせる	61% (199名)	2.91 (0.94)
子どもの前後左右に落ちて 歩いて歩く子どもを 配置する	58% (189名)	3.8 (0.71)
列から飛び出した後に 危険を伝える	56% (182名)	2.95 (0.90)
飛び出しそうになった時に 大きな声で危ないと叫ぶ	24% (78名)	3.5 (0.93)
信号待ちの際に車道から 遠い場所に並ばせる	24% (76名)	3.93 (0.81)
子どもに散歩ヒモをつける	1% (4名)	4.33 (1.20)

(%の母数は散歩の際に列から急に走り出してしまう子どもを担当した経験のある324名)

\*: 対応をしたことがあると答えた者による効果の測定結果を示している